

2022（令和4）年度

1 日 [＊]

国 語

注 意

- 1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は、六十分である。
- 2 問題は声を出して読まないこと。
- 3 問題用紙は二十四ページ、、 の二題から成っている。
- 4 問題用紙および解答用紙に、落丁、乱丁、汚損あるいは印刷不鮮明の箇所などがあれば、手をあげて監督者に申し出ること。ただし、**内容に関する質問は受けつけない。**
- 5 解答は必ず**鉛筆**を使用し、**解答用紙に記入**すること。
- 6 解答はすべてマーク式の解答欄①②……を丁寧にぬって解答すること。
- 7 訂正箇所は、消しゴムで**完全に消す**こと。
- 8 解答に関係のない符号（？レなど）や文字は記入しないこと。
- 9 解答用紙を折ったり、汚したりしないこと。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

《話されたことば》が実現するとき、そこで発せられたことばがもたらす、《話し手自身という聞き手》にとつての意味と、《他者たる聞き手》にとつての意味は、自ずから異なつて実現し得る。少なくともそう考えるのが、自然であろう。二つの物理的な条件がそうさせる。

一つは、《話し手自身という聞き手》と、《他者たる聞き手》という、二重の聞き手の間の、時間的、空間的な距離の存在である。腕枕で寄りソう相手に語りかけるときも、レストランの同じ食卓で話していても、話し手と聞き手の間にはごくごく微細にせよ、物理的な隔たりが存在する。同じく《いま・ここ》のものであると、生理的には感じられる《話されたことば》の実現には、微細に見ると、原理的にこうした物理的な隔たりが存在している。学校の教室での講義も、大きな会場のコウエンも、物理的な隔たりは存在し、さらに大きくなる。時間の隔たりが感じられないようなこうした言語場でも、空間的には明らかな隔たりが、話し手にも聞き手にも見えている。携帯電話やインターネット越しに話しているのであれば、こうした物理的な隔たりはいよいよ大きい。私たちは、相手の声が時間的に一瞬遅れて聞こえてくる、などということもしばしば経験したであろう。《a》《こうした場合にはことばの実現そのものが時間的な《遅延》となつて顕在化する。テクノロジーによつて、《話し手自身という聞き手》と、《他者たる聞き手》の間のこうした時間的、空間的な距離は、今日いくらかでも引き延ばすことができる。ここで重要なことは、《話されたことば》にあつては、もともと原理的に《話し手自身という聞き手》と、《他者たる聞き手》という、二重の聞き手が存在しており、そこには時間的、空間的な隔たりが存在していて、それら隔たりが常にある》であるということにある。テクノロジーによる時空の隔たりの極大化は、もともと隔たりが存在するという存在論的な現実には、基礎づけられているのであつて、隔たりそれ自体をテクノロジーが創り出したわけではない。

言語場におけるこうした時間的、空間的な隔たりの原理的な存在は、《話し手自身という聞き手》にとつての意味と、《他者たる聞き手》にとつての意味が、自ずから異なつて実現し得る、言語場における物理的な基礎となる。《b》《ざつくばら

んに言ってしまうと、時間的にも空間的にも異なった位置で、異なった個人たちが聞くのだから、ことばの意味も異なっていて、何の不思議もない。むしろ全く同一であることが、原理的には難しい。ことは「書かれたことば」であれば、いつそうはつきりと確認できるであろう。ここではこうした原理的な隔たりを確認し、隔たりの拡張をめぐる問題は後に論ずることにする。

「話されたことば」が実現するとき、そこで発せられたことばがもたらす、「話し手自身という聞き手」ととしての意味と、「他者たる聞き手」ととしての意味を、自ずから異なって実現せしめる、今一つの決定的な原理的条件は、他ならぬ話し手と聞き手という、異なった主体の存在に求められる。ここでもざつぱらに言えば、人が異なるのだから、受け取る意味も異なるだろうということになる。この原理的条件こそ、X などという言説の、理論的な根拠も、実践的な拠り所も放逐してしまう。話し手と聞き手の個体の違いは、ありとあらゆる個人史の違いに支えられて、個々人の言語を異なったものとして造り上げ、つまりコードもまた様々な偏差を本質的に含んだ、異なったコードとして働かしめ、言語をめぐる様々な諸条件も異ならしめる。

あるたった一つの単語から立ち現れる意味でさえ、同一である保証はない。「メ」「ユビ」といった身体名称でも、「ハハ」「キョーダイ」といった親族名称でも、「ココロ」「ユメ」などという目に見えない対象の名称でも、「ジョーネツ」「カクメイ」などといったⅡな単語でも、異なった個人の間でやはり同一であると、見ることの方が言語にとつては困難である。自然数の「サン」「シ」などといった概念でさえ、その個人の数学的な経験によって意味するところは、異なり得るであろう。「シゼンスー」などといったが、こんな概念はジュウゼン⁽⁵⁾たる意味の実現さえ、いよいよ危ぶまれて来る。《 c 》

もちろん日常の言語だけではない。「書かれたことば」に目を転じるなら、アラン・ソーカルの試みは、一度は触れられてよい。ニューヨーク大学物理学教授であったソーカルは、一九九四年、米国の Social Text 誌に“Transgressing the Boundaries: Towards a Transformative Hermeneutics of Quantum Gravity”（諸境界を踏み越える：量子重力の変形解釈学に向けて）と題された論文を発表した。そして同論文が実は自然科学の術語や数式などを配した、全く無内容な「疑似論

文」であることを、後に公開した。同論文はポストモダンイズムと呼ばれる諸論考の多くの引用を組み込んでおり、そうした言説における自然科学的な術語や概念の

Ⅲ

な濫用も批判するものであった。このことがもたらした後の大きな一連の出来事を含め、「Sokal affair」(ソーカル事件)^(エ)などと呼ばれる。

社会的に認知された雑誌にトウコウ^(エ)されたこの「疑似論文」のテキスト全文が、幾人の人に読まれ、その全てに何らかの意味がそこに実現したかどうかなど、もちろん判るよしもない。しかしながら雑誌の編集に当たっても、そして実際の掲載論文の題名だけ見たとしても、題名に接した少なからぬ人々の間で、ことばが意味とならなかつたり、あるいは「曖昧なる意味」が立ち現れたりしたであろうことは、想像に難くない。《d》少なくとも、今本書で初めてこの論文の題名に接した人々、初めてではなくとも、うつすらという記憶の中で改めてこの題名に接した人は、まさにそうした「曖昧なる意味の実現」を、まさにこの本を読みながら、いま・ここで、体験したであろう。《^{おぼろ}朧げなる意味》と言ってもよい。ここで本書が仮に付した日本語訳についても、訝^(いぶ)しみながら、何となくこんな意味か、といった納得をなさったかもしれないし、ここは「踏み越える」じゃなくて、「侵犯する」だろう、ポストモダンイズムを装うのだから、などと、翻訳自体に疑義を挟むほどに、意味の実現について瞬間にせよ、あれこれの体験をなさったかもしれない。

^Bここで問うているのは、倫理ではない。言語である。倫理についてはもう多くの論考がある。ここでは、学会誌をめぐる言語場に現れた、こうしたことばを前に、まさに読み手によって異なつた意味が実現し得ること、さらには「曖昧なる意味」《^{おぼろ}朧げなる意味》が実現し得ることの体験を、分かち合っている。ここで立ち現れる《意味》は、まさに個によって異なっている。このことを読者の皆さんはたつた今、共にしてくださつたであろう。さらに進んで、こうしたことばを前にするとき、「外延的意味」「明示的意味」「文字通りの意味」などと言われる denotation と、「内包的意味」「暗示的意味」「言外の意味」などと言われる connotation の区別さえ、溶解し始めることを、お感じになつたかもしれない。そしてそれらの区別さえ、境界付けが本質的に難しいことも、察せられるであろう。《e》

ソーカルが問うた言語場は、学術論文をめぐる言語場であつたが、ここから詩の言語場はすぐ隣にある。件の題名が、詩の

雑誌に詩として掲載されていたら、倫理的な問いはおそらく立ち得ない。もちろん文学的評価をめぐる問題が問われることは、あるかもしれない。私たちにとって重要なことは、このことである。学術論文であれ、詩であれ、言語場の違いは、同じことばでも場合によっては直ちに倫理や政治に直結するなど様々だが、〈書かれたことば〉における意味の実現の現実的な機制とありようには、何ら違いはないということ。

ことばが意味とならないことから、臆気なる意味となること、そしてはつきりとした意味となること、ことばが意味となる言語場にあつては、こうした〈意味の濃淡〉が立ち現れる。この〈意味の濃淡〉は、個によつて異なり得るし、同じ個にあつても、また言語場によつて異なり得る。これが意味の実現の現実的なありようである。

ことばの発話者たる話し手や書き手と、ことばの受話者たる聞き手や読み手の間の意味の立ち現れ方の違いは、言語にとつて本質的なものである。このことを、時枝誠記のように、発話者を特権的に位置づけ、言語活動を発話者が発話する過程であるごとくに見ると、発話者と受話者の間の意味の立ち現れ方の違いも位置づけ得ないし、受話者ごとに意味が異なつて現れることも、位置づけ得ない。そこでは受話者は別の発話者、発話者の単なる写しに過ぎなくなつてしまふ。発話者と受話者の間の意味が異なり、受話者間でもまた意味が異なり得る、その物理的な基礎は、既に述べたように、ことばが発せられ、受け取られる、時間的、空間的なずれ、落差と、発する主体と受け取る主体が異なるという、言語場の構造に規定されている。

これまで述べてきた、〈言語場においてことばが意味となる機制〉を纏めよう…

発話者はことばを発する。発話者は発せられたことばに意味を造形し、発せられたことばが意味となることを、誰よりも先に体験する。ここで既に自らのことばへの異議も立ち現れ得る。そして発せられたことば自体は、一旦意味から自由になる。ひとたび意味から解き放されたことばは、可能なあらゆる受話者に開かれている。そしてことばは受話者によつて受け取られたとき、受話者に在つて新たな意味となる。受話者が異なれば、立ち現れる意味もまた異なり得る。こうした事態は、〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉のいずれにも原理的に違いはない

同じことばから、意味はいつも異なつて立ち現れ得る。そしてことばが実現する言語場に着目するなら、世界に二度と同じ言語場はない。かろうじて「同じ」であり得るのは、ことばそのものだけなのである。

(野間秀樹『言語存在論』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。)

注 コード——情報を表現する記号・符号の体系。

問一 傍線部(ア)～(エ)のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) ソウ

- 1 小論文をテンサクする
- 2 テンキヨ資料を示す
- 3 セイテン白日の身となる
- 4 ロテンで駄菓子を買う
- 5 損失分をホテンする

(イ) コウエン

- 1 駅伝をエンドウから観戦する
- 2 最新学説をエンヨウする
- 3 エンガワから庭を眺める
- 4 エンザン速度の向上を図る
- 5 ホウエンな人物の描画

(ウ) ジュウゼン

- 1 ゼンセンした試合
- 2 リョウゼンたる事実
- 3 ゼンシンのな進化
- 4 地位をホゼンする
- 5 ゼンジン未踏の快拳

(エ) トウコウ

- 1 オンコウな人物
- 2 最新の情報にコウシンする
- 3 論文のコウガイをまとめる
- 4 手紙文のジコウの挨拶
- 5 作家のシュコウが見つかる

問二 傍線部(あ)・(い)の語句の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(あ) ざくばらんに

- 1 いたずらに
- 2 おもむろに
- 3 あけすけに
- 4 いちどきに
- 5 だしぬけに

(い) 訝しみながら

- 1 不備を認めつつ
- 2 記憶を頼りに
- 3 何度か確認して
- 4 不審に思いつつ
- 5 理解できないなりに

問三 空欄

I

く

III

に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。なお、一つの語は一回しか用いてはならない。

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|----|-----|
| 1 | 文化的 | 2 | 論証的 | 3 | 排他的 | 4 | 有機的 | 5 | 抽象的 |
| 6 | 歴史的 | 7 | 可変的 | 8 | 道德的 | 9 | 恣意的 | 10 | 複眼的 |

問四 本文中の《a》《b》《c》《d》《e》のうち、次の一文を入れる箇所として最も適当なものを後の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

まさに曖昧なる意味の実現を日常的に体験することになる。

- 1 《a》 2 《b》 3 《c》 4 《d》 5 《e》

問五 傍線部A 携帯電話やインターネットとあるが、これらがもたらしたものについて本文ではどのように述べられているか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 テクノロジーの進歩が、話し手と聞き手との間の時間的・空間的な隔たりという問題の解決をいつそう困難にした
- 2 〈話し手自身という聞き手〉と〈他者たる聞き手〉という二重の聞き手が存在することを誰の目にも明らかにした
- 3 話し手と聞き手という二者がいることによって以前から存在していた両者間の隔たりをこれまでになく大きくした
- 4 技術によって、空間的な距離のある話し手と聞き手が意味を交わすことを可能にし、それにかかる時間を小さくした
- 5 異なる空間にいる者同士では意味が異なってしまうという原理的問題を、通話や通信の遅延が証明することになった

問六 空欄

X

に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 人が異なるのに、全く同一の意味が実現する
- 2 人が異なる以上、全く同一の意味は成り立ち得ない
- 3 話し手の内部においては、全く同一の意味が成り立ち得る
- 4 物理的・主体的隔たりのない場で、全く同一の意味が実現する
- 5 聞き手の他者性を解消しさえすれば、全く同一の意味が実現する

問七 傍線部B ここで問うているのは、倫理ではない。言語であるとあるが、筆者はどのようなことを言いたいのか。その

説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 ソーカルの「疑似論文」に付けた仮の訳にどれほど〈曖昧なる意味〉が現出しているかを実感するために、読者が疑義を挟み込むような訳を付したことの倫理的な良し悪しはいったん議論しないでおきたいということ
- 2 ソーカルの事例をことばの意味は曖昧にしか実現されないという実例として議論したのであって、ポストモダニズム的な言説を「疑似論文」で批判したという手法の倫理的な是非を論じたいわけではないということ
- 3 注目してほしいのは、全く無内容な「疑似論文」によるポストモダニズム批判という「事件」の倫理性が、ソーカルの論文の内容よりも言語における〈臆げなる意味〉を論じるのにとっても適した事例であるということ
- 4 ソーカルが問題にしているのは、自然科学的な術語や概念を濫用しているポストモダニズムの倫理観ではなく、日常の言語のみならず「論文」という専門領域においても言語の意味が曖昧に実現されるという事実であるということ
- 5 ソーカルは、全く無意味な「疑似論文」であることを後に公開するというやり方でポストモダニズムを批判したが、むしろその倫理観に悖る方法こそが言語における〈曖昧なる意味〉の実現という課題を明確にしたのだということ

問八 傍線部C 受話者は別の発話者、発話者の単なる写しに過ぎなくなってしまうとはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 様々な意味が立ち現れる言語場において、受話者は言語場に立ち現れる意味と発話者の発した意味との差異に常に留意せねばならないということ
- 2 言語場におけることばの意味の実現の現実的な機制からすれば、発話者を言語活動の特権的な主体と見る考え方は誤りであるということ
- 3 ことばの意味の実現の現実的なありようを考慮せず、発話者が発した意味を正しく理解した者だけが受話者として認められるということ
- 4 ことばの〈意味の濃淡〉という事実 に立脚すると、発話者が発した意味は受話者に届くまでにかなり薄まってしまうということ
- 5 言語の意味の立ち現れ方の違いを無視し、受話者が発話者の発した意味を受け取って表わすだけの存在と位置づけられるということ

問九 次は、この文章を読んだ後に六人の生徒が発言している場面である。本文の趣旨に合致しないものを、次の選択肢の中から二つ選び、その番号を答えなさい。

1 生徒A——「11の次に大きい素数は何か」というシンプルな数学上の問いに対し、「7」と「13」という異なる答えが出てくると聞いたことがあります。これは、異なった個人間では単語レベルですら意味が同一にならないという筆者の主張の好例ではないかと考えます。

2 生徒B——話し手と聞き手との意味に差異が生じる要因の一つとして、筆者は両者の間にある物理的な隔たりを挙げていました。郵便、電話、ネットと進化するテクノロジーがこの隔たりを少しずつ解消していますが、原理的なものとして存在し続けるのでしょうか。

3 生徒C——ソーカルの「疑似論文」の題名に筆者が付した仮の訳に対し、納得する人もいれば疑義を挟む人もいるだろうと筆者は想定しています。題名だけでそのような差異が生じるのであるから、論文に目を通した人たちの間には様々な意味が立ち現れたことが想起されます。

4 生徒D——発話者がことばに込めた意味が受話者に伝わらないという事態は日常の言語場においてもよく見られることですが、このときのことばの意味の隔たり、つまり筆者の言う「意味の濃淡」は、受話者が受け取った意味が発話者にフィードバックされて初めて生じるものですね。

5 生徒E——「空腹だ」ということばそのものが「同じ」であつたとしても、発話者は時に同意を求め、時に何が欲しいという要望を含意している。同様に受話者の受け取り方も様々だ。この意味のずれは、言語場の構造に規定されていて完全に拭うことは難しいだろう。

6 生徒F——筆者は「書かれたことば」であれば、ことばの意味が異なることはより明確だと述べています。「話す」と「聞く」という行為の間の時間的・空間的隔たりが意味の差異を生むのであれば、「書く」と「読む」の間では意味の差異がいつそう生まれてしまうと推察できます。

二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

注¹
スペンサー思想の重要性は、近代社会の時代精神である進歩の観念を進化の観念と接合し、万物を見渡す視座をこしらえた点にある。いまやこの視座は、私たち現代人にとってあまりにも明白な常識になってしまっている。もはや彼の名前を思い出す必要すらない。進化を進歩と同一視するこの思想は、学問の世界ではすでに否定されているが、常識の世界ではいまなおびくともしない堅牢さを誇っている。これが、非ダーウィン革命によって近代人に刷り込まれた進化思想だった。

ところで、進化論を人間社会に適用しようとするこのような思想は、一般に「社会ダーウィニズム」と呼ばれる。でもそれは、いま見たようにダーウィンではなくスペンサーが提唱したものだ。ダーウィンも人間の道徳の成立などについて優れた進化論的考察を残しているが、スペンサーのように大胆に（あるいは軽率に）「社会進化論」を提唱したことはなかった。

だからスペンサーこそ「社会ダーウィニズム」の開祖であり代表者である。だが、闘争と進歩を旨とするスペンサーの進化思想の内実は、「社会ダーウィニズム」という呼び名とは異なり、資本主義的な自由競争をラマルクの^{注2}な発展的進化論^Bによって正当化するものであって、実際には「社会ラマルキズム」以外の何物でもなかった。

ダーウィンの信奉者たちがジャーナリズムを通じて熱心に I したのも、その結果として近代人の心に根付いたのも、もっぱらこのスペンサー流の進化思想だ。だから、これまで「社会ダーウィニズム」と呼ばれてきた思想は、実際にはかつて一度もダーウィンの進化論であつたためしはないということになる。それは実質上は「社会ラマルキズム」ないしは「スペンサー主義」であり、本来ならそう呼ばれるか、あるいはたんに「社会進化論」などと呼ばれるのがふさわしいものだったのである。

結局、誰もが「ソースはダーウィン」としながら、発展法則にもとづく非ダーウィ的な発展的進化論を好き勝手に開陳^(あ)していたのである。日本においても、明治期に輸入されて以来、少なくとも一般社会、つまりお茶の間やジャーナリズムにおいては、「進化論」はつねに社会進化論であり、「ダーウィニズム」はつねにスペンサー主義であつた（し、現在でもおそらくそ

うである)。

では、こんな結果になったのは、ダーウィンの真意を理解できなかった一般タイシユウのせいなのだろうか。そうとばかりもいえない。学問の世界で起こったのも、非ダーウィン革命だったからだ。

当時の専門家の多くも、ダーウィンの真意を十分に理解することができなかった。とくにダーウィン進化論の根本アイデアであるはずの自然淘汰説は、二〇世紀前半には息も絶え絶えの状態だったといわれている。それが学界で名実ともに中心学説としての地位を確立したのは、現在の進化生物学の主流派である総合説(ネオダーウィニズム)が登場した一九四〇年代になってからにすぎない。かなり最近のことだ。それまでの約百年間、ダーウィンの名前は権威として君臨しながらも、その学説の理解は怪しいものだったのである。

では、ダーウィン進化論(ダーウィニズム)の革命性はどこにあったのか。いろいろな語りかたができると思うけれども、とりあえずおおざっぱにいうとそれは、生物進化のメカニズムを自然主義的に説明する道を拓いた点にあるということができる。自然主義的に説明するとは、進化の目的や神の摂理といった形而上学的あるいは超自然的な原理なしに、因果的な自然法則のみを用いて生物進化を説明するという意味だ。それによって種々の主張をケンショウ可能なかたちで提出できるようになり、進化論は実証的な科学理論の仲間入りを果たしたのである。

それを可能にしたのが自然淘汰説である。次の三条件——個体間に性質のちがいがあること(変異)、その性質のちがいが残せる子孫の数と相関すること(適応度の差)、それらの性質が次世代に伝えられること(遺伝)——がそろったとき、自然淘汰のプロセスによって進化(遺伝的性質の累積的な変化)が起こる。これらはすべて自然主義的に説明できるものであり、その上位や下位に進化の方向性をつかさどるような存在や原理を想定する必要はない。

この考えは、ラマルクやスペンサーの発展的進化論が想定した進化の発展法則を不要にする。これが発展的進化論とダーウィンの進化論(ダーウィニズム)とのあいだにある決定的なちがいであり、非ダーウィン革命において忘れられた大義であった。

これは学説上の些細なちがいではない。

II

は重大である。これによってダーウィニズムは發展的進化論とはまっ

たく異なった進化観をもたらしことになるからだ。進化とは「偶発性」(contingency)に左右されるものだという新しい進化観である。

發展的進化論の進化観においては、あらゆる生物は「存在の連鎖」(chain of being)——もつとも下等なものからもつとも高等なものまでが連続的につながった階梯^{かいてい}——の一員である(これはプラトンの昔から長いあいだ西洋の思想で影響力をもっていたイメージだ)。そこでは進化とは、共通の目標へと向かうこの階梯を上昇していく過程にはかならない。それぞれの生物種はその階梯における位置によって優劣を比較することができるし、あるべき未来の姿を予言することもできる。

それにたいして、ダーウィンの進化論(ダーウィニズム)においては共通の目標など存在しないのだから、進化の過程は偶発的なものになる。進化には目的も終点も存在しない以上、ある生物種とべつの生物種の優劣を直接に比較することなどできなくなるし、あるべき理想の状態や未来の姿といったものを予言することも不可能になる。

未来を予測するなら、現時点で大いに繁栄しており、ほとんど打ち負かされていないか、まだほとんど絶滅させられていないグループは、この先も長期にわたって増加を続けることだろう。しかし、そのグループが最終的に繁栄するかは誰にも予測できない。なぜなら、かつては大成功を収めていたグループで今は絶滅してしまっているものも多いからである。

(ダーウィン『種の起源』より)

その結果、自然淘汰説がもたらす生物進化のイメージは、發展的進化論が想定していた存在の連鎖ではなく、不規則に枝分かれする樹木のようなものになった。それが「生命の樹」(tree of life)である。このようにしてダーウィニズムは、生物進化のミチスジ^{みちすじ}はあらかじめ定められたものではなく予見不可能な偶発性に左右されるものであり、その世界は整然としつらえられた存在の連鎖ではなく不規則に枝分かれする生命の樹であるという、従来とはまったく異なった進化観を提示することに

なった。存在の連鎖から生命の樹へという転換である。

^{注3} リチャード・ドーキンスは、これまでに人間が考案した進化理論は、煎じ詰めれば三つしかないと言っている。すなわち、

ラマルキズム、自然神学、そしてダーウィニズムである。前二者とダーウィニズムのちがいは、その説明体系に偶発的契機が組み込まれているか否かにある。もし偶発性を考慮に入れる必要があれば、進化論はラマルキズムか自然神学で事足りただろう。ラマルキズムにおいては、生物はあらかじめ定まった方向に進化することが決まっているため、そこに偶発性が入り込む余地はない。自然神学では、生物は神様がデザインすることになっているため、ここにも偶発性の余地はない（**X**）。ダーウィニズムは、進化の説明において系統的に偶発性を考慮に入れた唯一の理論なのである。

ただ、このことはダーウィニズムを、見た目に反してとても理解しづらいものにした。ラマルキズムも自然神学も、ある意味では人間の自然な思考習慣に合致した考え方をする。その自然な思考習慣とは**目的論的思考**である。キリンは高所の葉っぱを食べるために首を長くしたとか、神が自身のため人間のために生き物を創造したという考え方だ。目的論的思考は、それ自体は日々の暮らしに役立つ、というかそれなくしては生きていけないくらい重要な思考習慣だ。これがなければ朝ごはんのためにパンを買うこともできなくなってしまう。つまり私たちの行為の多くが宙に浮いてしまうことになる。専門家ですら便宜のために**目的論的思考の助けを借りる**。たとえば、眼はものを見るために、脚は移動するために、肺は酸素を取り込んで二酸化炭素を排出するために発達した、等々（そもそも「**III**」という概念自体が**目的論的**である）。しかし厳密に言えば逆なのだ。それは、ものを見るのに適した形質をもった個体が生き残り子孫を残した結果なのであり、移動するのに適した形質をもった個体が生き残り子孫を残した結果なのであり、以下同様なのである。ダーウィニズムは、先の三浦俊彦の言い方を借りていえば、目的論的にしか理解できない事象を結果論的に説明する方法を**発明した**。^{注5} エリオット・ソーパーはこれを「目的論の自然化」と呼んでいる。ここで大事なことは、目的論的にしか理解できない事象を結果論的に説明する革命的理論を手にしたとしてもなお、私たちがその事象を目的論的にしか理解できないという事態は変わらないということだ。いわば説明はできて理解ができないのである（そもそも理解とは目的論的な思考習慣によるものだ。眼や脚の由来を「結果論」的に理解

するとはどういうことなのか、私たちにはなかなか想像できない。

（吉川浩満『理不尽な進化』による。出題の都合上、一部省略した箇所がある。）

注

1 スペンサー——イギリスの哲学者（一八二〇～一九〇三年）。彼の考えを筆者は次のようにまとめている。

スペンサーは宇宙のあらゆる事物が進化すると考えた。みんな同一の進化の原理に従っている。その原理とは、同質的な状態から異質的な状態への移行、つまり単純な状態からより複雑で構造化された状態への移行だ。そうした進化が進むにつれ、事物はよりよいものとなり、より完成へと近づいていく。

（出典の別箇所より引用）

2 ラマルク——フランスの生物学者（一七四四～一八二九年）。

3 リチャード・ドーキンス——イギリスの生物学者（一九四一年～）。

4 三浦俊彦——日本の哲学者（一九五九年～）。

5 エリオット・ソーパー——アメリカの哲学者（一九四八年～）。

問一 傍線部(ア) (ウ) のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) タイシュウ

- 1 捕えられユウシュウの身となる
- 2 物事のシュウヘンから検討する
- 3 政治家のキヨシュウが注目される
- 4 実力はシュウモクの認めるところだ
- 5 とんだシュウタイをさらしてしまう

(イ) ケンシヨウ

- 1 激しいケンマクで叱られる
- 2 新人ケンシュウの講師
- 3 ケンアクな雰囲気が漂う
- 4 撤退はケンメイな判断だ
- 5 ケンテイ試験を受ける

(ウ) ミチスジ

- 1 食パンをイツキン買う
- 2 キンゾク三十年の表彰
- 3 テッキン三階建ての家屋
- 4 二者の勢力がキンコウする
- 5 惜しくもキンサで敗れる

問二 傍線部(あ) (う)の語句の本文中の意味を説明した表現として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(あ) 開陳して

- 1 誤解して
- 2 表明して
- 3 解釈して
- 4 批判して
- 5 捏造して

(い) 息も絶え絶え

- 1 氣息奄奄きそくえんえん
- 2 死屍累累ししるいらい
- 3 因循姑息いんじゆんこそく
- 4 切齒扼腕せつしやくわん
- 5 悶絕蹙地もんぜつびやくじ

(う) 便宜のために

- 1 自然な思考習慣に合わせるために
- 2 間違いではあるのだが無意識に
- 3 最善ではないと知りつつ都合から
- 4 説明を簡便にするため積極的
- 5 専門家間の認識差を埋めるために

問三 空欄 I III に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。なお、一つの語は一回しか用いてはならない。

- | | | | | |
|------|------|------|------|-------|
| 1 科学 | 2 習熟 | 3 帰結 | 4 昇華 | 5 敷衍 |
| 6 契機 | 7 機能 | 8 誤謬 | 9 生命 | 10 吹聴 |

問四 傍線部 A いまなおびくともしない堅牢さを誇っているとはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 学界では既に過去の人物であるスペンサーが、一般人にあつてはいまだ大思想家の地位を占めているということ
- 2 現代人が常識として堅固に信じるスペンサーの進化思想を覆す力は、学問の世界には備わっていないということ
- 3 ダーウィニズムを否定する非ダーウィン革命により生まれた思想が、常識の世界では信奉されているということ
- 4 人間社会は漸次よくなっていくのだというスペンサーの思想が、現代一般人の間では信じられているということ
- 5 非ダーウィン革命で否定された思想が、常識の世界には「社会ダーウィニズム」として残存しているということ

問五 傍線部B 発展的進化論とあるが、次の文章は、筆者が同書の別の箇所で「発展的進化論」について説明したものであ

る。空欄 i ・ ii に入る語の組み合わせとして最も適当なものを後の選択肢の中から一つ選び、その番

号を答えなさい。

進化をあらかじめ定められた方向への前進とみなす考えは、後に「定向進化説」として知られることになった。進化が i な目標に向かって近づいていくことであるならば、進化とはすなわち前進であり上昇であり、すなわち進歩にはかならない。これが発展的進化論と呼ばれるゆえんだ。進歩、改良、前進、上昇という、ラマルクが生きた ii 主義の時代の進化論である。

i ii

1 原理的——新自由

2 近代的——実存

3 最終的——功利

4 絶対的——要素還元

5 究極的——啓蒙^{けいもう}

問六 傍線部C ダーウィン進化論（ダーウィニズム）の革命性はどこにあったのかとあるが、筆者はその「革命性」をどの

ような点に見出^{みいだ}しているか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 生物の進化は、超自然的原理からではなく、予期せぬ要素に影響されて生じるものだという考えを示した点
- 2 環境に適合したものが世代を重ねて広まっていくと実証したことが、科学的な見地から学界で注目された点
- 3 進化と進歩を同一視するラマルクやスペンサーの思想は、科学的な見地から誤りであると指摘した点
- 4 新しい進化論として優れているのとどまらず、発展的進化論を否定するという大義に貫かれていた点
- 5 生物が不規則に枝分かれして進化しているという現実から、自然淘汰説に基づく進化論を作り上げた点

問七 空欄

X

に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 人が望めば進化の方向性はおのずと定まる
- 2 神は偶然を備えないものには与えない
- 3 自然神学の神様はサイコロを振ったりしない
- 4 自然神学は進化の選択肢を極めて広く想定する
- 5 自然神学は進化のif（もし）を許容しない

問八 傍線部D 逆なのだとはどういうことか。その具体的な説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 脚の発達の方向性が前もって決まっていたということではなく、他の生物より優位な脚を持った生物が本質的に有利なまま生まれた結果が進化であるということ
- 2 進化とは、キリンが環境に有利に適応するために首を伸ばすことではなく、生存に適した首の長いキリンが代々生き残ってきた経緯のことだということ
- 3 進化という事象は、目的論的思考の助けを借りて理解するのは容易でなく、結果論的に解釈することが可能な事象であるということ
- 4 肺を呼吸のための器官と理解するのではなく、その働きを持った器官を肺と呼ぶのだと捉えることで正確に理解できるのが進化という概念であるということ
- 5 進化とは、よりよくものを見るために眼が発達したと考えるよりも、眼を備えた生物がその働きを向上させようとして生き残ってきた結果とみなすのがよいということ

問九 本文に関する説明として適当なものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 現在ではその功績は否定されているが、スペンサーは進化論を実証的な科学理論として大成することに貢献した
- 2 ダーウィン進化論は神の存在自体を否定する急進的な思想だったので、学界でも一般人にも長く受容されなかった
- 3 人間が考案した進化理論は三つあるが、「連鎖性」を考慮した点でダーウィンの考えは他の二つを凌ぐものだった
- 4 ダーウィニズムの立場からは、進化の過程が現時点でどの程度で、この先どうなるのかを見定めることはできない
- 5 筆者は客観的な姿勢を保ちつつも、「社会ダーウィニズム」に対する一定程度の批判や揶揄を忍ばせて論じている
- 6 自然淘汰説は日常的な感覚では理解が難しいため、革命的理論でありながら学界での地位は低いものに甘んじている

国語解答用紙 1日【*】

一

問一	(ア)	● ② ③ ④ ⑤
	(イ)	① ② ③ ● ⑤
	(ウ)	① ② ③ ● ⑤
	(エ)	① ② ③ ④ ●

問二	(あ)	① ② ● ④ ⑤
	(い)	① ② ③ ● ⑤

問三	I	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ● ⑧ ⑨ ⑩
	II	① ② ③ ④ ● ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩
	III	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ● ⑩

問四	① ② ● ④ ⑤
問五	① ② ● ④ ⑤

問六	● ② ③ ④ ⑤
----	-----------------------

問七	① ● ③ ④ ⑤
問八	① ② ③ ④ ●
問九	① ● ③ ● ⑤ ⑥

二

問一	(ア)	① ② ③ ● ⑤
	(イ)	① ② ③ ④ ●
	(ウ)	① ② ● ④ ⑤

問二	(あ)	① ● ③ ④ ⑤
	(い)	● ② ③ ④ ⑤
	(う)	① ② ● ④ ⑤

問三	I	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ●
	II	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩
	III	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ● ⑧ ⑨ ⑩

問四	① ② ③ ● ⑤
問五	① ② ③ ④ ●
問六	● ② ③ ④ ⑤

問七	① ② ● ④ ⑤
問八	① ● ③ ④ ⑤
問九	① ② ③ ● ● ⑥

50点

50点